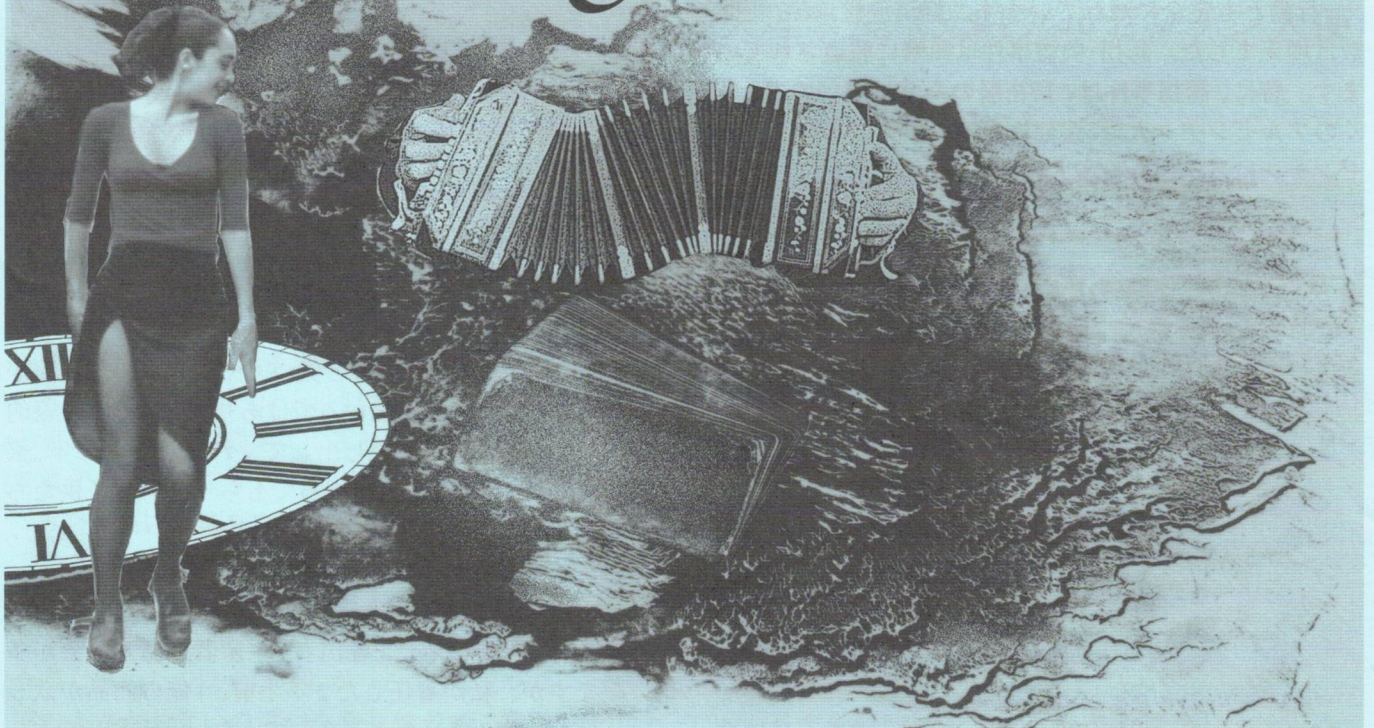


# Argentina

アルヘンティーナ

No. 45



©星野 美智子

社団法人 日本アルゼンチン協会 会報

2004年 11月

アルゼンチンは今 .....	1	対談 日本のサッカー .....	7
ボルスキ大使にきく .....	3	アルゼンチン経済の現況 .....	10
タンゴと交差点 .....	6	アルゼンチンで食料確保 .....	13

## アルゼンチンは今

三浦 聡

駐在2年半になった今でも、「?Le gusta Argentina?(アルゼンチンは好きですか?)」とよく聞かれます。いつも決まって「Me interesa Argentina (アルゼンチンに興味があります。)」と応えます。食糧、鉱物、人的資源がふんだんにあって、全世界を相手に堂々と債務交渉。経済危機後でも、カジノ、高級レストランは混んでいる状態。ヨーロッパのようでヨーロッパではない、ラテンアメリカのようでラテンアメリカではない。唯一の独自色をもった強烈な国・アルゼンチン。私には、全く不思議かつ興味深くてなりません。すっかり「アルゼンチン」の魅力にとりつかれています。

### ● 旅行

観光地に行きますと、聞きなれない様々な言語が飛び交っています。ペソ通貨が1/3に切り下がりましたので、米国、ブラジル、チリ、スペイン、イタリア、ペルー…日本、それに他の国から多くの観光客が来ているからです。

それでは、1ペソ=0.33ドルでアルゼンチン人が旅行をやめたかという違いまして、1ペソ=1ペソの国内旅行に転じました。その結果、国内観光地は、どこも満員御礼。早めに予約を入れないと航空券、宿泊施設はすぐになくなってしまいます。



## ● 治安

失業・貧困問題は、解決はしていません。“ピケテロ”と呼ばれる政府への抗議運動を展開し道路を封鎖するグループが街を行進しています。一部のグループは、かなり先鋭化しており、一般のアルゼンチン人とは、考え、行動とも完全に離れています。経済危機以降、犯罪数は増えました。誘拐・強盗事件は頻繁に報道されています。特に、誘拐事件は、富裕層のみではないので、多くのアルゼンチン人は、深刻に受け止めています。アルゼンチンに長年住む日本人は、ここ数年で極度に治安が悪化したと言います。

## ● 生活のため、将来のため

大通りには、窓拭き、物売り、ボール類を使って芸を見せる人、物乞いの人があります。窓を拭いて一回10～20円程度の稼ぎでしょうか。先日、アルゼンチン北部のサルタ、フイ地方へ行って来ました。ある街で、ガイドさんから「街の人から乞われてもお金をあげないで下さい。」との説明。お金を貰えば働く気力を失うというのです。一方、別の街では、地元の若者が観光ガイドをしてくれるのですが、別れ際に、この若者に僅かばかりのガイド料を渡します。これは、地元の制度によって、彼の生活費ではなく、勉強するための教育資金として利用されます。現状に満足せず、常に、改善し続けなければならないという気質に触れ、元気づけられました。

## ● 週末はどこも人で一杯

緑が多いブエノスアイレスでは、週末、公園で過ごす人が多いです。日光浴、散歩、団欒、サッカー…。“日本庭園”は人気スポットで入口に行列が出来ていることもあります。映画は安い所では3.5ペソ（130円）で見ることができますが、空席が目立ち、人気があるのは10ペソ（370円）しますが最新で綺麗な映画館です。また、ショッピングセンターは大勢の人で賑わっています。経済危機後、スーパーが消費低迷で売上が落ち込んでいた中、ショッピングセンターは、外国人観光客のお陰で売上を伸ばしていました。今日、ショッピングセンターの客層は地元の人たちが中心です。

## ● 家庭の教育

「アルゼンチンの好きなところを挙げてください。」と問われたら「家族、親類を大事にすること。」と答えます。誕生日、クリスマス、年末、結婚記念日…、みんなよく集まります。一番仲良しのアルゼンチン人の友人が、こうしたイベントによく招待してくれます。彼は、妻と子供4人の6人家族。先日、あるスポーツ施設に出かけた時のことです。みんなでテニスに興じている隙に、私のサッカーボールがなくなってしまいました。安いボールだからいいよというのに、友人は引き下がりがありません。彼が誘ったスポーツ施設でボールがなくなったことに責任を感じている訳です。そして、私が驚いたの



ブエノスアイレスのレストラン

は、ボールが盗まれていると気づくや否や彼の子供達が四方に散って探し始めているではありませんか。最終的に、彼の10歳の長男が探し出してくれました。毎年、家族・親類みんなに誕生日を祝ってもらっている子供たちが学んでいるものは形ではないことが分かりました。

## ● 輸出する人たち

仕事柄、アルゼンチン輸出者・生産者と話す機会が多いのですが、私が着任した2年半前、「俺の商品が欲しければ、ここにコンタクトをしてくれ。」「日本が輸入したいなら輸出するよ。」という輸出者が確かに存在していました。しかし、輸出者のメンタリティーは、ここ数年で大きく変わってきていると思います。ある輸出者は私に言いました。「薦められて訪日したけどビジネスの成約は得られなかった。しかし、日本市場の感触と次ステップへのやる気を得た。」その後、再訪日し、商談をまとめてきました。

## ● 21世紀のアルゼンチンを担う人たち

アルゼンチン外務省に勤める女性の知人がいます。夫婦共働きの彼女には3人の子供がいます。いわば経済環境に恵まれた子供達です。アルゼンチンの将来について話をした時、彼女が言いました。「私は、週末や休みになると子供達を市内や地方の貧民街に連れて行くの。自分の子供達にはアルゼンチンの貧困の現実を教えるために。」と。また、地方の40代前半の市長が私に言いました。「古い世代のメンタリティーを変えるのはもう無理だ。次世代の我々がアルゼンチンを変えていく。」

アルゼンチンが、今後、どんな方向に進んでいくのかわかりません。ただ、若いエネルギーなアルゼンチン人、積極的なアルゼンチン人、そして、豊富な資源、これら全てが稼動し始めたら、いつでも最強の国に化けられる環境は整っていると思います。

(みうら さとし、JETRO (日本貿易振興機構)  
ブエノスアイレス事務所)





# 日本語の勉強も始めたポルスキ新大使

きき手 木島輝夫理事長（元駐アルゼンチン大使）

— 5月に着任されてから半年ですが、日本の印象はいかがですか？

「アルゼンチン協会の会員やその他沢山の日本の方々にお会いしました。日本には、アルゼンチンの好きな人が多いのでうれしいです。私は、両国が思った以上に似ている点が多いと思います。人に親切にするところとか、音楽を愛する心とかですね。

タンゴだけではありません。先日、立教大学でのオラルテ氏のフォルクローレ演奏・講演会に参加しました。会場の日本人たちがオラルテに合わせてみんなでアルゼンチンの歌を合唱し出したのはすばらしかったです。2つの国の人達がお互いの違いを乗り越えて一緒になっているように思いました。

文化の交流がお互いを理解し合う第一歩だと思います。先週、台風の中でしたが、福島県のコスキン・ハボンにも行ってきました。

6月着任早々の茨城県の長田小学校訪問は、感動的でした。300人の児童がアルゼンチンの歌を（サンバ・デ・ミ・エスペランサ）原語で歌った時のことは忘れられません。先週、ブエノスアイレスからサッカー「ボカ・ジュニオール」の若いチームが日本へ試合に来た時、選手を大使公邸に招いて、ボカチームのTシャツに寄せ書きをもらい、長田小学校の「アルゼンチンの部屋」に飾ってもらうようにと学校に送りました。」

「子ども達は未来を持っています。子供達を育て教える行くことは私達の責任だと思います。」

— たしか、長田小学校で初めて毛筆をお使いになりましたね？

「そのとおりです。生れて初めてです。あれ以来日本語に関心が高まり、日本語の勉強を始めました。「カタカナ」と「ひらがな」はともかく、漢字はわれわれには難しいです。でも、何とか覚えたいと努力しています。」

— アルゼンチン人と日本人が似ているという話がありました。違っているところをあげるとすれば、どういうところでしょうか。

「うーん……ラテンの人間は、割合個性的とかという



長田小学校で毛筆を使うポ大使

か individual などところがあるのに比べて、日本の場合は、social cohesionつまり、社会的なまとまりがあるというところが違うかもしれませんね。しかし、われわれの方も変わってきています。たとえば、アテネ・オリンピックでは、チームワークの大事なサッカーとバスケットボールで金メダルを取りました。」

— そうでしたね。日本は、逆に、サッカーだけでなく団体競技が駄目でしたね。（笑い）

— この会報の中で、アルゼンチン協会の仲間でエコノミストの小林晋一郎さんが、アルゼンチン経済回復について書いてくれています。ポルスキ大使の見られるアルゼンチン経済の現状はどうですか？

「アルゼンチン経済は、この2年間に改善されてきました。消費が伸びています。投資も8期連続して伸びています。」

— 何人かのアナリストによると、外国からの投資の関心が低いのではないですか？

「外国からの投資は入ってきています。来年以降は、もっとあると思います。」

「貿易輸出は、主にメルコスール向けに伸びています。」



メルコスールは、EU、インド、南アフリカと貿易交渉をしています。FTTAとの交渉は、米国の大統領選挙の関係で進んでいませんが、選挙が終われば再開するでしょう。」

#### 一 貿易の品目はどうですか？

「相手国によります。たとえば、中国は、われわれの大事な取引国ですが、日常雑貨品などを輸出しています。」



ポ大使と木島大使（大使館）

#### 一 伝統的に農牧製品の輸出が多かったのですが、変わってきていますか？

「農牧製品は今でも大切な輸出産品です。数量にすれば一番です。しかし、今は、工業製品の輸出が増えてきています。」

「メルコスールが大きな変換をもたらしています。メルコスールは、関税同盟にとどまりませんでした。メルコスールの中小企業が、まず域内への輸出を刺激され、次いで他の地域への輸出を考え出しました。域内の integration が進んでいます。チリは、準加盟国ですが、非常に熱心で、いまや正式メンバー並です。ブラジル、アルゼンチンで新大統領が就任して以来メルコスール統合の機運はより高まっていると言えるでしょう。」

アルゼンチンとブラジルは、2003年にコパカバーナ協定を交わし、全世界の両国大使が、駐在国で、情報交換、駐在国への戦略対応で相談し合っています。もちろん東京でもそうしています。」

#### 一 日亜貿易はどうですか？アルゼンチン・ビーフの輸入が可能になるよう願っているのですが。

「この1年間、アルゼンチン経済が回復して、日本からアルゼンチンへの輸出がぐんと伸びました。アルゼンチンから日本への輸出は少し伸びました。」

「日本は、信頼のできる食料供給国を多角的に求めており、一方アルゼンチンは、信頼される食料供給国でありたいと思っています。両国は、補完的な立場にあると思います。」

「来年3月に、また、日本で FOOD EX（食料輸出展示会）が開かれます。アルゼンチン政府と業界は、今年の2倍の展示スペースを予定しています。」

アルゼンチンワインは日本市場への輸出に熱心です。牛肉ですか？うーん。日本は、ゼロ・リスクを要求する国ですから厳しいですね。日本は、世界中でアルゼンチン牛肉が出ていない数少ない国の一つです。ただ、メルコスールのおかげで、アフトーサ（口蹄疫）撲滅のために、これまでより関係国の間で防疫のための協力体制が強まりました。」

#### 一 統計的にはアルゼンチン経済が回復し、政府には財政余剰が発生しているのに、それを外債返済に回さないというのは理屈にあっていないのではないですか？

「マクロ経済指数は確かによくなっています。しかし、アルゼンチン経済は、あと10年から15年かけて着実に伸ばす必要があります。債務の再編成はできるだけ早く終わらせることが大切だと思います。」

#### 一 大使は、映画がお好きなようですね？

「そうですね。映画は、われわれ両国の社会や人間の問題をもっとよく知り合う最大のコミュニケーションの一つだと思います。特に20歳から35歳くらいまでの若い世代ですね。」

「クロサワ」のことは勿論みんな知っていますが、アルゼンチンも、最近ベルリン映画祭で、最優秀映画賞と主演男優賞をもらいました。抑圧時代の「家庭」や「デイリー・ライフ」をテーマにしたものもあります。映画は、コミュニケーションにとってもよいのではないのでしょうか。」

#### 一 ポルスキ大使は和食がお好きとうかがっています。日本は各地に自慢の料理がありますから大いに国内を旅行されるようお勧めします。

「ブエノスアイレスに和食レストランが沢山あって、そこで好きになりました。刺身、寿司、それに「しゃぶしゃぶ」ですね。感覚が少しフォンデュに似ていますね。それに、旅館が好きです。あの「ふとん」の感触がよいのですよ。先日、伊豆半島のとても由緒ある旅館に泊まることができ、日本らしさを満喫しました。」

#### 一 長時間ありがとうございました。大使のご活躍を祈念しますと共に、引き続き日本アルゼンチン協会ともよろしく願います。

（文責 河崎 勳）



# 大使公邸で会員懇親パーティー

Fiesta para los socios en la residencia del Embajador



Raúl Olarte y Carlos Pérez



Con Raúl Olarte (centro)

La Asociación organizó dos fiestas para los socios, en junio y octubre. Ambas reuniones pudieron efectuarse gracias a la gentileza del Embajador, Sr. Daniel Polski.

En junio, se pudo apreciar la guitarra de Carlos Pérez y los bailes de Laura y José María. En octubre se contó con

un recital de quena por Raúl Olarte y de guitarra y charango por Carlos Pérez. Ambos eventos contaron con más de cien socios que disfrutaron de empanadas, matambre y vino argentino.

(Irene Gashu)

# サン・マルティン胸像に乾杯

谷本雅世

7月25日、海上自衛艦「たつかぜ」の晴海－横須賀ツアーに参加した。良く晴れた日だったが意外と風が強かった。

海上自衛隊の隊員の皆様は素人のおじゃま虫たちに大変親切にしてくれた。こと細かな海上案内で、クルージングはグッと楽しめ、まるで観光船に乗船しているような錯覚さえ…何しろ「おもかじー！」の、操作室まで入室させてくれた。

夕方無事、横須賀到着。ペリー来航という歴史の出来事を思い出す。さて、これで目的が終わったわけではない。海上自衛隊とアルゼンチンの関係は？！

正解＝実は、横須賀の防衛大学校の敷地内にアルゼンチンの偉大なるサン・マルティン将軍の胸像があるのだ。

マイクロバスの道中で、中野常務理事が用意したアルゼンチン赤ワインやソフトドリンクで「サルー！」サン・マルティン将軍にも赤ワインを…胸像に献花し、記



念撮影を行って大満足。

アルゼンチンと日本とは、日露戦争の始まる前にアルゼンチンから2艘の軍艦を譲り受け、ロシアに勝利したことから始まる。その頃からの友情がおそらく、サン・マルティン将軍胸像の防衛大学校構内設置へとつながるのだろう。

胸像にはプレートが数枚あり、その1つには「AL PUEBLO DEL JAPON COMO PRUEBA DE AMISTAD. EMBAJADA ARGENTINA EN TOKIO. 6 DE MARZO DE 1956.」と刻まれていた。

しかし、日本の防衛大学校の一角にまさかサン・マルティン将軍の胸像があるとは。私も本協会に加入して初めてそのことを知った。

普段、めったに入れなさそうな防衛大学校の敷地内で、堂々とした風格のサン・マルティン将軍胸像は、久々の大勢の来客を喜んでくれていたような気がした。

(たにもと まさよ 会員)



# タンゴに登場する交差点

石川 浩司

タンゴには今は失われてしまった昔の街の情景を懐旧する歌が多くあって、その詞の中にはしばしば交差点の名前が登場する。曲名となったもので有名なのは、セレドニオ・エステバン・フローレス作詞、フランシスコ・プラカニコ作曲の「コリエンテス・イ・エスメラルダ」Corrientes y Esmeralda であろうが、他に詞の中で交差点名が重要なキーワードになっているものとしてオメロ・マンシ作詞、アニバル・トロイロ作曲の「スール」Sur に出て来る San Juan y Boedo とデバッシの古い作品に同じくマンシがあとから作詞した「マノブランカ」Mano Blanca に登場する Centenera y Tabaré がある。この3つを「タンゴに出現する3大交差点」という人もあるくらいだ。

「スール」は1948年に発表されたタンゴで詞の冒頭に「サン・ファンとボエドの角」San Juan y Boedo antiguo と交差点の名前が歌われる。「サン・ファンとボエドの角、一面の空。ポンページャ、その向こうは水たまり。思い出の中の君のお下げ髪。別れに浮かぶ君の名と、鍛冶屋の街角、ぬかるみ、パンパ、君の家、君が歩いた道、どぶ川、雑草とアルファルファの香りが再び私の心を満たす。スール、大きな壁、その向こうは…スール、雑貨屋の灯火…」

オメロ・マンシはこの詞をサン・ファンとボエドの角にあった喫茶店の机で書いた。この店はかつては日系人が経営する「日本」という店になり、その後は「カナディアン」という名前になった。(写真右上) いまは「エスキーナ・デ・オメロ・マンシ」というタンゲリーアになっている。幸い地下鉄のボエド駅のすぐ上なので簡単に訪問することが出来る

オメロ・マンシは1907年にサンティアゴ・デル・エステロの郊外で生まれたが幼いうちにヌエバ・ポンページャ地区にあったルッピという学校の寄宿生となり少年時代をここで過ごした。だから彼の作品にはこの地域に題材を取ったタンゴが多い。「スール」はその中でも最高の傑作で同じ年に発表されたディセポロの「ブエノスアイレスの喫茶店」Cafetín de Buenos Aires と並んで「タンゴ文学の極致」とされている。

詞ではサン・ファンとボエドの角からポンページャの彼方を展望する形になっているが、実際に行くとたしかにこの角からリアチュエロの方に下り勾配になっているけれども今では建物が密集して展望は利かない。しかし50年前はまだ向こうが見渡せたのか、それともマンシの懐旧の眼だけに見えた風景なのか。



エスキーナ・デ・オメロ・マンシ(93年当時)

水たまりというのはこの交差点からリアチュエロ川にかけては低地帯でしばしば洪水が起こったらしい。いまでは土手が築かれ、ペリト・モレノという道路が出来ている。

思い出の中の君のお下げ髪の少女はモデルが実在する。ルッピ学校の寄宿生だったマンシは週末にはある演劇教室に通っていたのだが、そこに通って来ていたファナ・ルビーノという少女に淡い恋心を抱いていたらしい。雑貨屋のガラスに寄りかかりマンシは彼女を待っていた。土手で20歳の彼女の唇にキスをするのもこの少女がお相手だろう。1942年に書いた「タンゴの街」Barrio de tango にもこのファナという名前が登場する。

さて第2主題ではこの曲のサビとも言うべき「スール、大きな壁、その向こうは…」 「スール、雑貨屋の灯火…」になる。この壁というのはエスキウ通りにあるなめし革工場の壁で今でも現存している。なお、原詞の Paredón を「壁」と訳すか「塀」にするかは迷うところである。工場の大きな壁も敷地を囲む長い塀も、どちらも詩になる風景なのである。

ここに出てくる雑貨屋はエスキウ通りとティルカラ通りの角にあったルイス・セルベンティ氏が経営していた店だと言われているが、先年訪問した際は当然かもしれないが影も形も残っていなかった。

なお、異説としてこの雑貨屋はのちにセルベンティ氏の一族となるアンヘラ夫人の「アルマセン・デ・ラグーナ」であって、それはセンテネーラ通りを横切る鉄道の踏み切りの傍にあったという話もある。

鍛冶屋についても写真は残っているがそれがどこの場所であったのかはよくわからない。

そしてマンシの回想は「タンゴの街」にも出てくる鉄



道の土手に向かい「思い出は人生が運び去った砂、消え失せた夢のほろ苦さよ」と嘆き「すべては死んでしまったのさ、わかっているよ」で締めくくるのだ。

それにしても50年あまりを経て自作の詩に歌いこまれた場所を尋ねて地球の裏側から探索の旅をする人間が居ようとはマンシは思っていなかっただろう。

そのオメロ・マンシの胸像がセンチネーラ・イ・タバレ Centenera y Tabaré の交差点に鎮座している。

この交差点は「マノブランカ」Mano Blanca に出て来る。「空色の荷車に手書きのイニシアルを書いて、ブロンズの星を光らせて。馬方さん、オ



オメロ・マンシの  
胸像脇で石川浩司さん

ンセの街からどこへ行く。スールの街を横切って…」  
「マノブランカ、ポルテニート、頑張れ、道は険しい、それももう少しだ」「今夜はあの女の瞳がセンチネーラとタバレの角で俺を待っている」

このタンゴは馬方と愛馬「マノブランカ」「ポルテニート」が仕事でブエノスアイレスの町を東から横断してねぐらがあるセンチネーラとタバレの角へ帰る様子を描いたものである。現在この角にはグレゴリオ・プロトニッキという人が経営する作業服店があって、その一部がマンシをはじめタンゴに関する博物館になっている。扉外に建てられたマンシの胸像もその一部であろうし、店の外壁は一面に「マノブランカ」の歌碑になっていて通る者の目をひく。ポンページャとタンゴを愛するプロトニッキ氏の情熱を感じる。同氏の語るところでは、この博物館の美術関係の仕事は沖縄出身の日系2世であるエレナ上原さんの手になるものだという。さきのサン・ファンとポエドの店が以前「日本」という日系人経営の店であったことも含めポンページャと日本人の関係に驚くのである。

(いしかわ ひろし、当協会理事)



## 誌上対談 日本のサッカー

オスワルド・アルディレスさん (東京ヴェルディ1969 監督)  
松本 育夫さん (サガン鳥栖監督)  
司会 河崎 勳

— アルゼンチンは、アテネ五輪で優勝しました。一方日本は、五輪には出場しましたが予選リーグで敗退。年齢層が違いますが、アジアカップでは優勝、W杯1次予選は突破しました。日本の力をどう見ますか？

アルディレス「日本サッカーのレベルは非常に上がっています。私は1996年に清水エスパルスの監督として日本に来ました。その頃は韓国の方が強かったのですが、今は日本の方が強いです。世界では、ブラジル、アルゼンチン、フランス、ドイツ、イングランド、イタリア、この辺りがいわば抜きがたいエリートですが、日本は、その下のランクに追いつくぐらいのところまで来たのではないのでしょうか。」

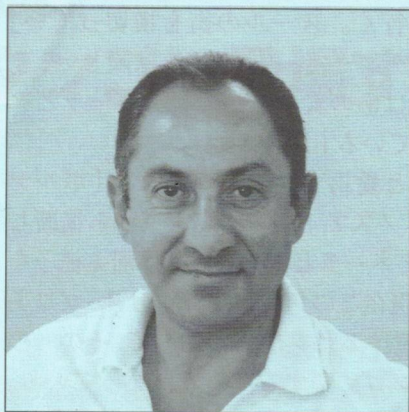
— 日本の選手が、体力では外国勢に見劣りしなくなったという点には同意できますか？

松本「体力には3つの側面があります。90分を走りきる持久力と、30メートルを走るスピードとでは外国勢に負けていません。しかし、30メートル疾走のあと、もう1度30メートルを折り返すとすると力が落ちます。身長、体重が少し違うし、筋肉の質が違うのかも知れません。回復力が弱く、そこだけが違う点です。」

アルディレス「私は、司会者の意見に同意しますね。欧州にいる中田(英)や小野を見ても、そうじゃないですか。日本選手が体力的に劣るところは今や全くありません。

テクニックもそうです。東京ヴェルディに、アルゼン





## オスワルド・アルディレス

アルゼンチン生まれ。コルドバ大学卒。1978年、アルゼンチンW杯でアルゼンチンが優勝した時の大会最優秀MF。1982のイタリアW杯にも出場。その後イングランドのプロ・リーグで選手としてプレー。トットナム・ホットスパズなどで監督として指揮し、メキシコ、クロアチアなどでも監督を務めた。日本では、Jリーグ清水エスパルスの監督としてチームを一挙に上位に上げた。横浜マリノス監督としては1年目で前期優勝。現在は東京ヴェルディ1969監督。

チンとブラジルから1人ずつ選手を呼んできていますが、明らかに日本選手のほうがテクニックは上です。」

— それでは日本に欠けているものは何でしょうか。私の見るところ、日本選手は、相手ゴールに近づくと慌てるというか、パニックというか、惜しいところでバックパスを試みたりしてチャンスを逃している気がします。外国選手はしゃにむにゴールに向かいます。日本選手はきれいなシュートを打たないと気がすまないのでしょうか？

松本「きれいなシュートを打つという気持ちは昔はありました。今はなくなりました。おかげさに言うと、狩猟民族と農耕民族の違いですよ。われわれは、「嘘をついてはいけません。人を騙してはいけません。素直でなければいけません。」と叩き込まれてきました。それが日本文化の美でした。ゴールを奪うことは、ある意味では守備陣をごまかすことでもある訳で、その辺りに文化の違いがあるのかと思います。ゴール前でのハンタリーさは、外国選手の方が上かもしれませんね。」

アルディレス「同感ですね。日本でも、ジュビロ磐田の中山選手のように無理な姿勢からでもゴールを奪おうとする選手もいますけれどもね。彼は例外ですね。外国人はselfish—自分中心ですから。一方日本では、「でしゃばり過ぎない方がよい。」という思想がありますからね。文化の違いというのは分かります。」

— ゴール前で無理にボールを回しているように見えるのは、戦術的なものもあるのでしょうか？

アルディレス・松本「それはありません。」

アルディレス「日本の中盤の運びはよいと思います。相手ゴール前では、もう少し「悪る」になってもいいかも知れませんね。でも少しずつ変わってきていますよ。」

— メキシコ五輪で得点王になった釜本選手のような強いストライカーが久しく日本に現れません。ストライカーを育てるにはどうすればよいのでしょうか？

アルディレス「サッカーは、フィールドでボールを回す

のが目的ではありません。ゴールにボールを入れることが目的なのです。だからロナウド(ブラジル)のようなストライカーが必要なのです。しかし、サッカーでは守りや中盤の動きは教えることができますが、ストライカーを作ることはできません。」

松本「サッカーでは、あるレベルまでの選手を育てることはできます。しかし釜本のような選手を作りあげることができません。マラドーナやペレを作り上げることができないのと同じです。」

— それでは、日本のストライカーは出現を待っているしかないのでしょうか？

アルディレス「ヴェルディにいる若い森本選手とか、アテネ五輪へ行ったあの背の高い選手—平山選手ですか—そう、彼らはよいストライカーになれる可能性があると思います。」

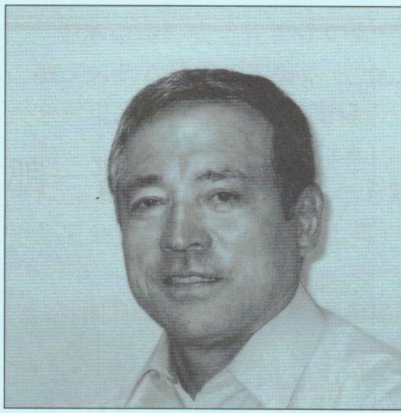
— 日本のサッカーのレベルを高めるためには、よい指導者を確保して、若い人を鍛え上げて行くしかないと思いますが？

松本「日本のサッカーは、1960年にドイツからクラマーさんを招聘した時点で脱皮しました。クラマーさんは指導はもちろんですが、日本に対して、①それまでのトーナメント大会だけではなく、リーグ戦を作って切磋琢磨の機会を増やすこと、②指導者を養成すること、③プロサッカーを作ることの3つを提唱し、日本サッカー協会はこの忠告に従いました。彼は、日本近代サッカーの父ですよ。日本の指導者はどんどん増えています。協会によって厳しく認定される指導者ライセンス保有者が、2万人になりました。」

昔の日本代表選手は、サッカーから引退すると企業戦士に戻って行きましたが、今は、Jリーグの選手は引退後は各地域に密着して指導者になっています。これは大きいですよ。」

— 欧州や南米のサッカーがクラブを基礎にしているのに対して、日本のサッカーはまだ、中学校・高





## 松本 育夫

早稲田大学卒。1968年メキシコ五輪代表チームのウイング。3位入賞のメダリスト。大学1年生から8年間、日本代表チーム選手。1972年から1979年まで、ユース（18歳以下）日本代表と23歳以下日本代表の監督、全日本代表チームのコーチを兼ねて若い選手の育成に当たった。1999年、J-2の9位だった川崎フロンターレ監督に就任、一挙にJ-1に昇格させた。2002年には、創立されたばかりの長野県地球環境高校を率いて7ヵ月後に県優勝させて全国大会に出場。現在は、Jリーグ「サガン鳥栖」監督。

校の学校サッカーがベースになっていると思いますが？

アルディレス「そのとおりだと思います。しかし、日本でサッカーを始める年齢は低くなってきています。以前は、11歳ごろから始めていましたから、それから世界に挑戦する選手を育てるには出発点が遅すぎたのです。今は変わってきています。5～6歳で始めているようです。

そのくらの年齢からベイシックな練習をして、14～15歳で私たちのところに送り込んでくれればよいと思います。」

— ベイシックとは？

アルディレス「ボールをコントロールするとか、パスを出すとか、ヘディングをすることです。」

松本「私は、日本のサッカーが必ずしも中学校・高校をベースにしているとは思いません。今Jリーグに加盟するチームは、3つの条件を満たさなければなりません。下部組織として、18歳以下、15歳以下、12歳以下の3段階のグループを持つことを要求されます。当然ライセンスを持った指導者がつかなければなりません。若い力を育てようということです。18歳以下のクラブ・チームは高校チームに勝つところまで力を伸ばしてきています。ただ、ビジネスとしては大変ですけどね。頑張っているのはJリーグ新潟アルビレックスですね。ドイツのスポーツ・クラブをモデルにして、よいクラブを作っています。新潟の地域ぐるみの応援体制は凄いです。」

アルディレス「アルゼンチンでもブラジルでも、クラブは盛んですが、子ども達にどういう風に教えて行くかという計画は持っていません。一方欧州は、サッカーを習いたければそれなりのスクールに入らないといけないようになっています。その違いは私もよく分かりませんが。」

— 南米の方が、個性を大事にするということですかね？

アルディレス「そうかも知れませんね。」

— 決して天才的ではないが、理論的には理解力が高く、組織力のある日本人が学ぶとしたらドイツのサッカーだと思うのですが？

松本「私は、アルゼンチンに学ぶべきだと思います。選手1人1人が個性を持ったプレーをし、それがチーム全体とよくミックスされていて実に厳しいサッカーをします。非常によく若手を育てています。」

アルディレス「それは慎重にした方がよいと思いますよ。日本のサッカーは、ブラジル人が選手や指導者として日本に来て、かなりブラジルの影響を受けながらここまでできました。今ここでそのバックグラウンドを変えて混乱すると困りますから。」

松本「日本の文化を見直さないとどうにもなりませんよ。昔の子どもは、木に登ることが楽しみでした。学校には歩いて行きました。今は、歩かないで車に乗る機会が増えてしまったし、パソコンゲームで部屋の中に閉じこもりきりというし、少子化は進むし、これでは、サッカーどころか人間の体が衰える一方の環境を作っていますよ。サッカーのプレーは、判断力と決断力を基にした自己表現です。気候、風土、宗教、親子関係、学校での勉強、そういうものが人間を形成して自己表現になって行くのですから、そういうことを考えましょうよ。」

アルディレス「サッカーの底にあるのは文化ですよ。」

— 最後に、日本のサッカーは、もう少し上へ行くのでしょうか。それとも暫くは足踏みするのでしょうか？

アルディレス「私は、今の調子で行けばどんどん強くなると思いますよ。あとは時間だけの問題ですね。」

松本「サッカーにもピンテッジ・イヤーがあって、よい選手に恵まれる時期とそうでない時期があります。ブラジルでも、ドイツでも、どこの国でもそうです。ですからどんな強い国でも常に優勝という訳には行かないのです。日本は、今の熱意と指導体制を続け、ピンテッジ・イヤーに恵まれた時、ぐっと伸びるでしょうね。」



# アルゼンチン経済の現況

小林晋一郎

アルゼンチンは1999年に経済がマイナス成長に転じ、2001年末に対外債務の支払を停止、未曾有の経済危機に突入したが、IMFとのスタンプ協定成立と経済政策の合意、世界経済の成長基調を背景に経済危機を脱出、経済の安定と成長が実現した。最近の経済動向と日本とアルゼンチンの経済関係について報告したい。

## 1. 最近の経済情勢

4年続きでGDP成長率はマイナスであったが、4半期ごとのGDP成長率を見ると2002年第1四半期のマイナス16.3%を底として2003年第1四半期は5.4%のプラス成長に転じ、景気が回復から成長路線に転じたことを示している。経済成長を支えた要因は世界貿易の拡大を背景とした好調な輸出と輸入代替の進展であったが、経済の安定に伴い国内投資と消費の伸びが見られるようになった。2003年のGDP成長率は政府発表で8.7%、2004年と2005年のIMFによる成長率予想はそれぞれ5.5%、4.0%である。

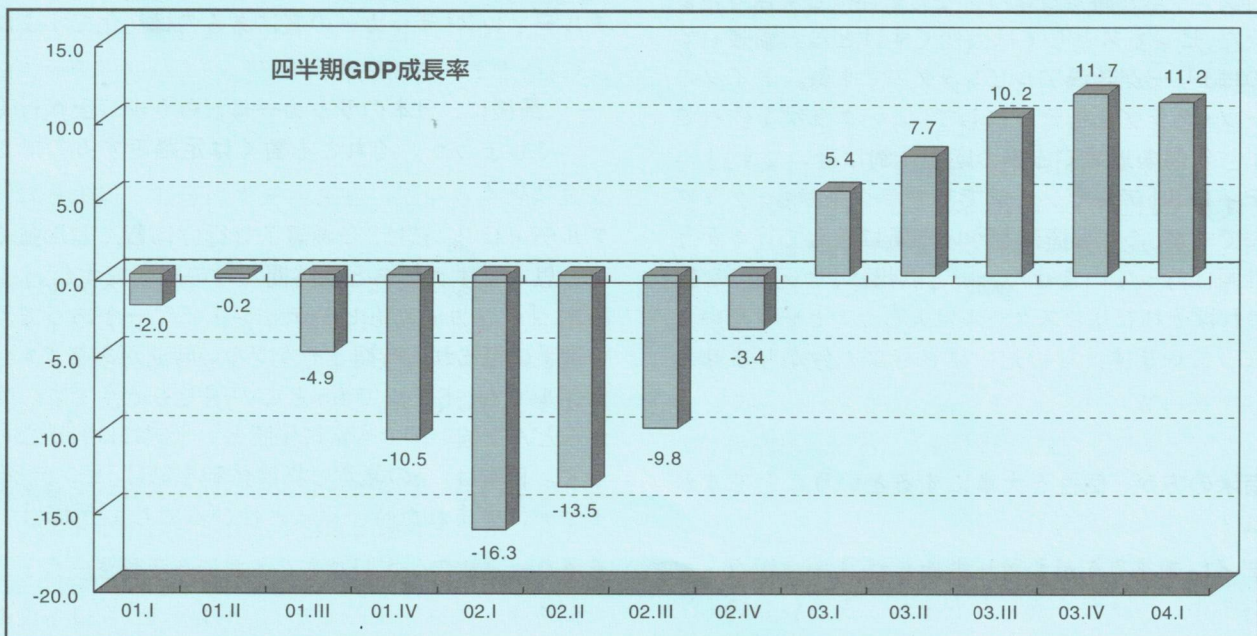
2001年の輸出は265億ドル、2002年は為替切下げ、変動相場制移行後も輸出は伸びず265億ドルに留まった。他方、その間の輸入は経済危機の影響で192億ドルから85億ドルに急減、同時に輸入代替が進展した結果、貿

易収支の黒字は73億ドルから172億ドルに拡大した。2003年は好調な大豆のほか穀物、食肉、果実や魚類の輸出増で輸出額は294億ドルとなった。一方、輸入も内需の回復で前年比大幅な伸びで131億万ドルとなり、年間の貿易収支は163億ドルとなった。

2004年上半期の輸出は166億ドル、輸入は101億ドルで貿易収支は65億ドルの黒字である。

景気の回復と徴税能力の向上で、2003年のプライマリー財政収支の黒字は86億7690万ペソでGDPの2.5%あった。2004年1~7月までのプライマリー財政収支の黒字累計は134億8800万ペソで、アルゼンチン財政史上最高の黒字を記録している。最終的な年間の黒字額は180億ペソに達するだろうと予想されている。

2001年12月から始まった預金引出し規制は全面的に解除され、民間部門の新規預金が増加している。中銀の通貨政策は貿易収支黒字資金を市場介入で吸収し経済へ流動性供給を行う、市場で流動性が過剰と判断される場合は中銀手形を発行し市場で売却、流動性を吸収し通貨供給量を管理しインフレ圧力を抑制するというものである。通貨供給量は通貨計画で定められた範囲内で推移しており、IMFに対するコミットを満たしている。



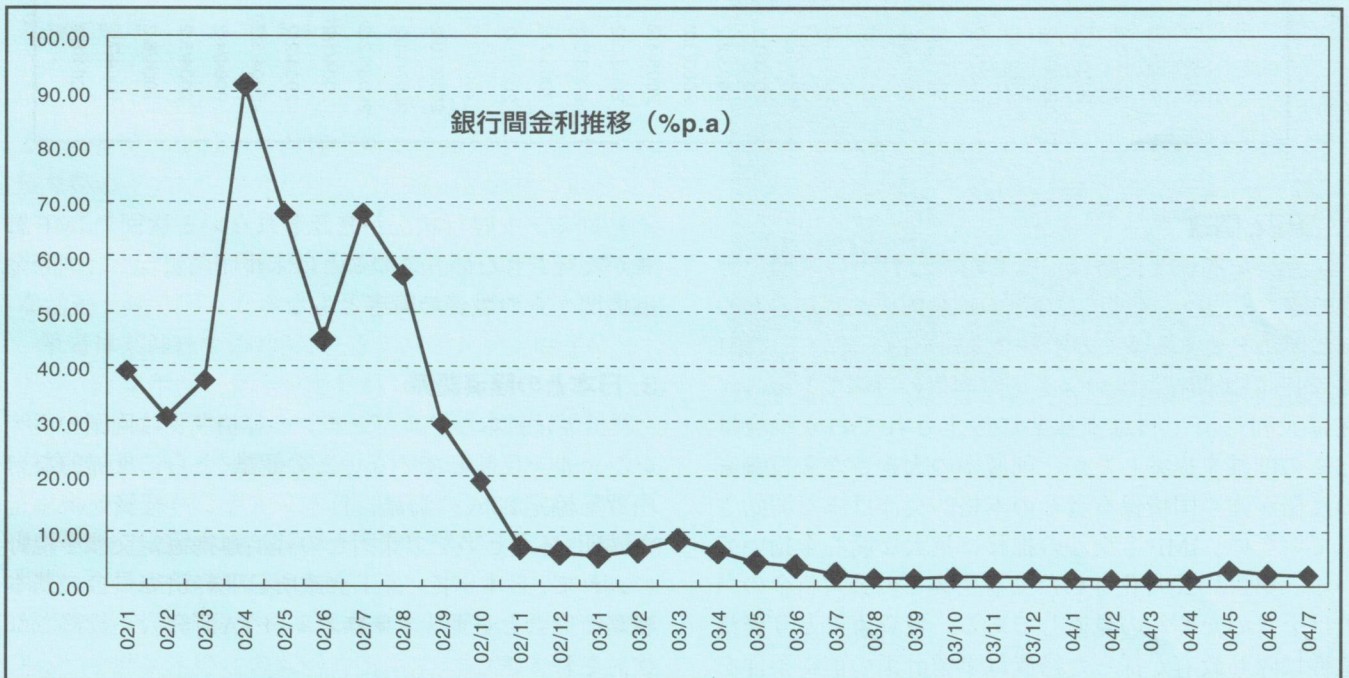


金融市場の安定化に伴い金利が低下、銀行間金利は金融システム危機の影響から2002年4月にピークの91.2%を示現、それ以降は金融市場の正常化の下で金利低下傾向となり2002年12月には6.1%となり、2003年12月は1.6%まで低下した。2004年も銀行の十分な動性を反映して金利は低水準で推移している。

外国為替市場は自由変動相場制に移行直後は大幅なペソ切下げであったが、貿易収支の黒地基調、政策に対する信認の回復による資本流出の減少から2003年以降は

ペソ高で推移している。ペソの対米ドル実勢為替相場の推移をグラフで示した。

米ドルベースでのブエノスアイレス証券市場株価指数は2002年6月の92ポイントから12月は156ポイントに上昇した。その後の株価指数の推移は次のグラフの通り上昇傾向にある。株価上昇は輸出企業のみならず国内販売企業、銀行にまで及んだ。国債支払停止の状況下で国際資本市場での新規証券は2001年の年央以降は起債されていない。







## 2. 展望と課題

経済が安定し成長路線に転じたことは上の説明で理解できたと思う。しかし、経済の持続的成長実現のためには解決を要する多くの困難な課題を抱えている。第1は、内外の民間投資家の保有する国債の再編である。現在は元利返済・利息支払共に停止されており政府は75%の削減を提案したが、削減率の大きさから投資家の反発が強く国債保有者との本格的交渉は未だ開始されていない。IMFも交渉の推移に重大な関心を抱いている。第2は、民営化された公益企業との公共料金の引上げを含めた契約の見直しである。投資家にとり経済危機に際し政府が採った措置は事業計画の前提条件を変更、民営化企業との契約改定交渉は難航が予想される。第3は、金融システム危機は回避されたが、銀行の金融仲介機能を回復させ生産部門への資金供給を増大させることである。第4は、経済活動を歪曲する租税である銀行勘定入金・払出税の廃止、輸出税の廃止である。第5は、輸出競争力の強化である。輸出促進のためには競争力ある為替相場に加え、金融と投資が不可欠である。輸出促進を阻害する要因として、輸出税、為替管理、輸出外貨の清算、輸出関連付加価値税返還期間の長さ（法律では15日と規定されているが現在45日）などが指摘される。

経済危機で投資が落ち込み工業部門で設備能力に余裕のある部門は自動車、金属加工、タイヤの3部門であり、GDP成長率が5%になると設備能力の限界に直面することが懸念される。輸出拡大のためにも投資の必要性が指摘される。第6は、州政府の債務制限を規定する財政責任法の議会承認である。最後に重要なことはIMFのスタンバイ協定に関わる第3回レビューである。アルゼンチンのIMFに対しコミットした構造改革（財政責任法、民営化企業との契約更改など）が履行されていないため一時的に交渉が中断している。レビューが終

了しコミット履行状況が確認されないと次回のIMF融資が実行されない。このことは米州開発銀行など国際金融機関からの融資の障害ともなる。

## 3. 日本との経済関係

経済界は日本とアルゼンチンの経済関係は両国のポテンシャルを反映していないとの認識、さらに世界的な自由貿易協定FTAの潮流、日本・メキシコ経済連携協定の調印、日本とアジア諸国との経済連携協定交渉を視野に入れて、日本・東京商工会議所日亜経済委員会に基本戦略研究会と日亜（メルコスル）FTA研究会が設置され検討されてきた。

基本戦略研究会は、これからの両国貿易の有望分野として農水産品、鉱物、ITの3分野を選定、アルゼンチン側と協議を重ね共同報告書を作成した。この報告書には上記3分野の現状、主要な問題点、克服すべき課題を盛り込んでおり、これに基づき行動計画を作成し、具体的な行動を実行し日本・アルゼンチンの貿易拡大を目指している。

日亜（メルコスル）FTA研究会は在亜日本商工会議所との共同研究会で、米大陸と欧州の間で巨大な共同市場となる大西洋ビジネストライアングルの形成を念頭に置きながら、企業のアンケート調査をベースに意見の集約を図り報告書に取りまとめた。日本とアルゼンチン・メルコスルとのFTA締結は日亜双方の貿易を拡大すると共に、日本の対亜直接投資を促進し日本とアルゼンチンの経済関係緊密化に寄与し、FTAの早期締結が望まれることが確認された。2004年3月、日本メルコスルFTAの早期締結に関する要望書が日亜経済委員会から日本政府に対し提出された。

（こばやし・しんいちろう 当協会理事、  
東京リサーチインターナショナル客員研究理事）





# アルゼンチンで食糧確保を

齊木 茂治

去る8月3日の暑い夏の夜、テレビ東京の番組「ガイアの夜明け」にて「南米大豆ロードをゆく～ニッポンの食糧を確保せよ」と題するギアリンクス社の活動が放映されました。

会員諸氏の中でご覧になった方もおられると思いますが、同番組では日本の食糧自給率の問題から始まって、岐阜県のギアリンクス社設立の経緯から同社アルゼンチン農場における大豆生産の様子、パラグアイの日系農協との大豆供給契約等々が、同社中田 智洋社長の精力的な活動を通じドラマチックに紹介されました。

筆者は某商社での3回に亘るアルゼンチン駐在にはじまり、約38年間に亘り日亜修好100周年記念事業（1998年）や日亜経済委員会、アルゼンチン大来財団、国際協力機構（JICA）、当協会等の諸活動に深く関与してきましたが、その間一貫して、（食糧自給率40%の食糧輸入大国で世界最大の純農産物輸入国である）日本の長期的視野に立った食糧確保には（米国、豪州と並び世界でも稀少な食料供給国である）南米アルゼンチン、ブラジル、パラグアイ等との戦略的関係拡大・強化が重要であることを主張してまいりました。

現に、最近中国や韓国は官民が連携してアルゼンチン、ブラジルでの農地取得やミッションの派遣等積極的に行動しています。

上記の筆者が関与してきた事業・活動に従事している日本の企業・組織の関係者で基本的にかかる主張を否定する人は殆どいません。然しながら、口では唱える人は沢山いても、いざ実行に移す（農地を取得・所有して自分で食糧を生産する）企業・組織は全くと言っていいほど現れません。日亜経済委員会を構成する日本の大企業は主として現地の企業・組織との契約関係を通じ食糧を輸入していますが、契約関係（約束事）と言うものは一度異常事態が生ずれば、相手国は政府・企業・組織を問わず自国・自国民の利益を最優先するので遵守されず輸入に支障を来すことは容易に予想されます。

その意味で、岐阜県ギアリンクス社の事業活動はアルゼンチンでは日本政府も大企業も為し得ぬことを率先して実行した画期的ケースであり、筆者は早速番組の主人公であるギアリンクス社中田社長より直に活動内容につき突っ込んだ話を伺うべくインタビューを申し入れ結果8月24日に実現しました。



2003年10月バラデーロ第一農場開所式  
(背広姿が中田社長)

前置きが長くなりましたが、以下にインタビュー結果を筆者の質問を“Q”中田社長の回答を“A”として纏めました。

なお、中田社長はもやしの生産・販売では日本でも有数の（株）サラダ・コスモの社長で米国での海外生産経験も豊富にて、何と1998年からの6年間で27回もアルゼンチンを訪問し農場生産現場での陣頭指揮をされた大変タフな仁であります。

**Q：** ギアリンクス社とは如何なる会社ですか？

**A：** ギアリンクス社のギ＝岐阜県、A＝アルゼンチン、リンクス＝連携で「岐阜県とアルゼンチンが手をつなげる」と言う意味は岐阜県の食糧確保計画に呼応して、純粋な民間企業（株式会社）ながら極めて公共性の高いNPOの精神でアルゼンチンを生産活動拠点とし、平時は安全食品の開発、緊急時には全力を傾けて食糧の増産及び調達を使命とする企業として2000年12月に設立され、本年8月現在410名の出資者による約1億円の資本金で岐阜県及び日本の食糧確保の一翼となるべく活動しています。

**Q：** ギアリンクス社がアルゼンチンで所有している土地はどれ程ですか？また、何をどの位生産していますか？





# アルゼンチンで食糧確保を

齊木 茂治

去る8月3日の暑い夏の夜、テレビ東京の番組「ガイアの夜明け」にて「南米大豆ロードをゆく～ニッポンの食糧を確保せよ」と題するギアリンクス社の活動が放映されました。

会員諸氏の中でご覧になった方もおられると思いますが、同番組では日本の食糧自給率の問題から始まって、岐阜県のギアリンクス社設立の経緯から同社アルゼンチン農場における大豆生産の様子、パラグアイの日系農協との大豆供給契約等々が、同社中田 智洋社長の精力的な活動を通じドラマチックに紹介されました。

筆者は某商社での3回に亘るアルゼンチン駐在にはじまり、約38年間に亘り日亜修好100周年記念事業（1998年）や日亜経済委員会、アルゼンチン大来財団、国際協力機構（JICA）、当協会等の諸活動に深く関与してきましたが、その間一貫して、（食糧自給率40%の食糧輸入大国で世界最大の純農産物輸入国である）日本の長期的視野に立った食糧確保には（米国、豪州と並び世界でも稀少な食料供給国である）南米アルゼンチン、ブラジル、パラグアイ等との戦略的関係拡大・強化が重要であることを主張してまいりました。

現に、最近中国や韓国は官民が連携してアルゼンチン、ブラジルでの農地取得やミッションの派遣等積極的に行動しています。

上記の筆者が関与してきた事業・活動に従事している日本の企業・組織の関係者で基本的にかかる主張を否定する人は殆どいません。然しながら、口では唱える人は沢山いても、いざ実行に移す（農地を取得・所有して自分で食糧を生産する）企業・組織は全くと言っていいほど現れませんでした。日亜経済委員会を構成する日本の大企業は主として現地の企業・組織との契約関係を通じ食糧を輸入していますが、契約関係（約束事）と言うものは一度異常事態が生ずれば、相手国は政府・企業・組織を問わず自国・自国民の利益を最優先するので遵守されず輸入に支障を来すことは容易に予想されます。

その意味で、岐阜県ギアリンクス社の事業活動はアルゼンチンでは日本政府も大企業も為し得ぬことを率先して実行した画期的ケースであり、筆者は早速番組の主人公であるギアリンクス社中田社長より直に活動内容につき突っ込んだ話を伺うべくインタビューを申し入れ結果8月24日に実現しました。



2003年10月バラデーロ第一農場開所式  
(背広姿が中田社長)

前置きが長くなりましたが、以下にインタビュー結果を筆者の質問を“Q”中田社長の回答を“A”として纏めました。

なお、中田社長はもやしの生産・販売では日本でも有数の（株）サラダ・コスモの社長で米国での海外生産経験も豊富にて、何と1998年からの6年間で27回もアルゼンチンを訪問し農場生産現場での陣頭指揮をされた大変タフな仁であります。

**Q：** ギアリンクス社とは如何なる会社ですか？

**A：** ギアリンクス社のギ＝岐阜県、A＝アルゼンチン、リンクス＝連携で「岐阜県とアルゼンチンが手をつなげる」と言う意味は岐阜県の食糧確保計画に呼応して、純粋な民間企業（株式会社）ながら極めて公共性の高いNPOの精神でアルゼンチンを生産活動拠点とし、平時は安全食品の開発、緊急時には全力を傾けて食糧の増産及び調達を使命とする企業として2000年12月に設立され、本年8月現在410名の出資者による約1億円の資本金で岐阜県及び日本の食糧確保の一翼となるべく活動しています。

**Q：** ギアリンクス社がアルゼンチンで所有している土地はどれ程ですか？また、何をどの位生産していますか？



**A:** 取得した農地は日本でも有名なパンパ大平原内に3箇所、アンデス山脈麓でワインの産地であるメンドサ州に1箇所、計4箇所合計約1,247haです。昨年パンパ平原のバラデーロ（ブエノスアイレスより北西約140km）農場にて非遺伝子組み換え、有機大豆の試験栽培を開始し、本年1000トンの収穫をあげました。製品の品質も上々にて、当初は日本向け出荷は考えていませんでしたが、折からの大豆相場の高騰もあって、早くも岐阜県内の豆腐製造業者約20社から引き合いがあり200トンを出荷、この8月に到着しましたので県民の皆様アルゼンチン産豆腐を食べていただくこととなります。今後4箇所の農場にて大豆や小麦等の穀類を生産し、同時に食用牛の放牧を含めた輪作体系を維持して全面積を農薬や化学肥料を使わない有機農業による取り組みを考えています。

**Q:** 何故岐阜県の活動となったのですか？ 将来岐阜県民の為だけでなく日本の全国活動に展開することは可能でしょうか？

**A:** 岐阜県は梶原前知事の確固たるポリシーと指導力の下、独自の食糧確保計画の中で県内・国内での調達・備蓄を最優先していますが、さらに補完として海外での調達をプログラムの中に採用しています。1998年（当協会木島理事長が駐アルゼンチン日本国大使として在任時）に梶原前知事が海外調達プログラムの候補地視察の為アルゼンチンを訪問された際、同国の持つ広大・肥沃な土地と食糧供給力を実感され、アルゼンチンとの連携を計る為の中田社長をはじめとする複数の岐阜県の食糧・食品関係の会社にギアリンクス社設立を依頼されたものです。従って、まずは岐阜県先行型の事業となっていますが、食糧確保は日本全体の死活問題であり、農地の取得でお世話になったJICAアルゼンチン事務所やアルゼンチン日系社会（県人会）を通じ日本の各県に繋いでゆく等草の根ベースでの全国展開に抜けてゆくことを考えています。

生産も平時は穀物のみならず、日本の市場ニーズがある安全・健康食品、例えば抗アトピーの入浴剤に使われる「よもぎ」の生産等多角化を計ることも面白いと思っています。

因みに、上記資本金1億円は岐阜県民のみならず日本全国に一口10万円（1株5万円×2株）の出資を募った結果、事業計画に賛同される410名の出資者により得たもので、出資者の内70%が岐阜県民、30%が他都道府県の方々であり、その意味では既に全国展開とに入っているとと言えます。

**Q:** アルゼンチンでの外国人による農業生産や農場の管理・監督は大変であり、これが、今まで日本の大企業が参入出来なかった最大の要因と思いますが如何ですか？

**A:** 確かに生産は自分でやると人や機械の手配が大変なので、バラデーロ農場の大豆生産はアルゼンチン人（スイス系移民）の有機認証を取れる信頼のおける農家と委託栽培契約を結んで任せ、ギアリンクス社は母豆の供給、栽培方法指導、収穫管理等のコントロールをしています。

農場・生産の立ち上げ時には私（トップ）が陣頭指揮に当たりましたが、軌道に乗ってからは、日系社会の優秀な人材をギアリンクス社の正規社員として雇用し、常時農場の管理・監督に当らせています。今後生産規模の拡大に応じこれが重要課題となることは重々承知しています。

**Q:** 最後に当協会会員へのメッセージをお願いします。

**A:** これから本腰を入れてアルゼンチン、パラグアイの日系食糧農家や農協等を前線基地とする草の根ベースでの日本の食糧確保を目指す所存でありますので、日本全国の皆様のご理解とご支援をお願いします。毎年弊社主宰による現地視察ツアーもやっていますので是非ご参加下さい。事業計画にご賛同される皆様の出資も大いに歓迎します。

（さいき しげじ、協会理事、  
大来財団日本評議委員会事務局長）

ギアリンクス社の連絡先とホームページ・アドレスは下記の通りです。

株式会社 ギアリンクス  
岐阜県美濃加茂市加茂野町鷹之巣 343 番地  
桜井食品内  
TEL (0574) 55-0033  
FAX (0574) 55-0036  
ホームページ・アドレス [www.gialinks.jp](http://www.gialinks.jp)

アルゼンチン南部6州の政府観光局が共同運営する“パタゴニア観光機構”は、日本から来る人のために日本語版オフィシャル・サイトを制作した。パンパ州から南極までの自然の映像や情報が盛り込まれている。

<http://www.patagoniaturistica.org.ar/jp/>

小木曾モニカ（ブエノスアイレス）  
mail: [monchikogiso@hotmail.com](mailto:monchikogiso@hotmail.com)（日本語）





# Resumen en castellano

por Irene Gashu

## Diseño de la portada (p. 1)

Portada especialmente diseñada para este Boletín por la artista Michiko Hoshino (Socia de nuestra Asociación y Directora de la Asociación Japonesa del Grabado)

## Argentina Hoy (p. 1)

por Satoshi Miura

Por la devaluación del peso, aumentó la cantidad de turistas del extranjero. Argentinos y extranjeros llenan los lugares turísticos.

Por otro lado, persiste el desempleo y la pobreza. La seguridad no ha mejorado. Sin embargo, la mentalidad de los exportadores está cambiando positivamente. Si se logra la unión de la energía de los jóvenes y la actitud positiva de los argentinos y se aprovechan los ricos recursos naturales, la Argentina puede convertirse en una potencia.

## Entrevista al Embajador Daniel Polski (p. 3)

por Teruo Kijima (Director jefe de nuestra Asociación y ex-Embajador de Japón en Argentina)

Los principales temas tratados en la entrevista fueron:

- \* A muchas personas en Japón les gusta la Argentina.
- \* Ambos países tienen más similitudes de lo esperado. La hospitalidad y la afición por la música son ejemplos.
- \* En el colegio primario de Nagata, prefectura de Ibaraki, 300 niños cantaron folklore argentino en español. Fue un momento emocionante.
- \* La economía argentina ha estado mejorando en los últimos 2 años. El consumo y la inversión están aumentando.
- \* Mercosur está haciendo un gran cambio. No se trata solamente de una alianza aduanera. Las exportaciones de las compañías pequeñas y

medianas en el grupo, fueron estimuladas. Primero, exportaron bienes a los países dentro del grupo, después a otros.

- \* Japón está buscando proveedores confiables de alimentos y Argentina desea mantener su posición de país proveedor confiable de alimentos. Ambos países se suplementan.

## Nombres de calles que aparecen en el tango (p. 5)

por Hiroshi Ishikawa

En las letras de los tangos aparecen con frecuencia nombres de calles. "San Juan y Boedo" es la esquina donde Homero Manzi escribió "Sur". Ahora, hay una tanguería llamada "Esquina de Homero Manzi". Pocos saben que allí mismo había antes un local llamado "Café Nipón", cuyo gerente era un japonés.

## Busto de San Martín (p. 6)

por Masayo Tanimoto

El 25 de julio pasado, 74 socios de nuestra Asociación disfrutaron de un paseo en un buque de las Fuerzas Japonesas de Auto-defensa. Se realizó también una ofrenda floral y un brindis con vino argentino ante el busto del Gral. San Martín en Yokosuka.

## El fútbol de Japón (p. 7)

Coloquio entre Osvaldo Ardiles e Ikuro Matsumoto  
Moderador: Isao Kawasaki

El fútbol japonés se está fortaleciendo. Todavía hay problemas para golear. Tal vez a los japoneses les cuesta más por las diferencias culturales que surgen del hecho de que ellos provienen de pueblos de agricultores mientras que los argentinos de pueblos de cazadores; pero el fútbol japonés continuará mejorando.

Osvaldo Ardiles Gran futbolista argentino.



Actualmente es Director en jefe de la Liga J “Tokyo Verdy 1969”

Ikuo Matsumoto Medallista de las Olimpiadas de México. Actualmente es Director en jefe de la Liga J “Sagan Tosu”

### Situación económica de Argentina (p. 10)

por Shinichiro Kobayashi

La tasa de crecimiento del PBI es positiva desde el primer trimestre de 2003. Han aumentado tanto las importaciones como las exportaciones. La balanza comercial en el primer semestre de 2004 fue de 6.500 millones de dólares. Sin embargo, quedan muchos problemas por resolver para lograr un crecimiento sostenido.

### Provisión de alimentos de Argentina (p.13)

por Shigeji Saiki

Entrevista al Sr. Nakata, Presidente de la compañía: “Gi-A links”. “Gi” por la prefectura de Gifu y “A” por Argentina. Esta compañía tiene 4 terrenos agrícolas en las provincias de Buenos Aires y Mendoza. Cultiva soja para enviar a Gifu.

En el futuro, planea proveer de alimentos a todo Japón.

## 編集後記

- ◆ 6月の総会決定で、会報の発行は1年に2回となりました。その1回目です。会報を2回にした理由は、情報伝達メディアが変化しつつあり、1年4回の印刷物では対応できない場合が多くなってきたことです。この会報と、1か月1回の月報、それにホームページでいろいろの情報を会員にお送りするというのが主旨です。
- ◆ 会報のフロントページのデザインは、当協会会員で日本版画協会理事の星野美智子さんに、ボランティア・ワークをお願いしました。
- ◆ アルゼンチン人のアルディレス監督と松本育夫監督をお願いしてこれもボランティアで、日本のサッカーを語ってもらいました。
- ◆ スペイン語の得意な会員のために、イレーネ賀集理事をお願いして、スペイン語による Resumen を作ってもらいました。(編集長)

## アルゼンチン情勢

### —政治・経済の主な出来事—

これまで、塩見憲一理事(東京リサーチ・インターナショナル研究理事)が担当して、アルゼンチンでの発表や統計から、政治・経済の主な動きをピックアップし、四半期毎に「ドキュメント」としてまとめて会報に掲載してきました。

会報が年2回の発行になりましたので、このドキュメントは半年分のまとめになり、分量も増えることになりました。そこで、今回は、この「ドキュメント」を別刷りにしました。

最も需要が高いと思われる法人会員には、会報に添付してお送りします。個人正会員、賛助会員の方は、ご希望の旨を事務局までご連絡頂ければ、お送り致します。

Eメールでの送付が可能ですので、Eメール送付をご希望の向きは、Eメール・アドレスをご連絡下さい。

この「ドキュメント」は、塩見理事の前任者、小林晋一郎理事執筆のころから数年間、途切れることなく続いており、データは、協会事務局で保管しています。将来、貴重な集積データになるものと思われます。

本会報のデザイン、記事の無断転用はお断りします。

日本アルゼンチン協会会報 第45号  
2004年11月22日発行

編集長 河崎 勳

編集発行 社団法人 日本アルゼンチン協会  
105-0004 東京都港区新橋 1-17-1  
新幸ビル

電話：03-3501-4684

FAX：03-3595-3932

Email：argentina@nifty.com

URL：http://www.argentina.jp

印刷 株式会社 アイデア・インスティテュート